

【症例トミー】〔男児、年齢：治療開始時11歳6ヶ月〕

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

・主訴；恐怖症。強迫神経症的確認行為。独り寝を怖がる。幻聴。分離不安。

GP(家庭医)からの紹介。

・家族背景；ワーキングクラス。和やかで安定した家庭環境。父親は技術職。母親は専業主婦。
年の離れた兄が一人いる(目下技術職をめざして見習い中)。

■資料その1；トミーについての治療レポート (日付不明)

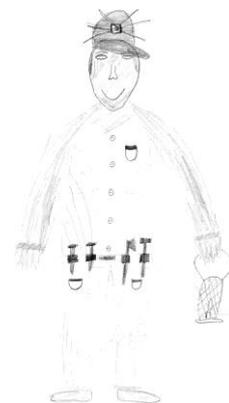
トミーは、1976年6月30日以降、週一回のセラピーに通っております。セッションの始まりにおいて彼はしばしば、わたしの顔にぼんやりとしたまなざしで凝視し、とても緊張した面持ちでからだを堅くしておりました。そして何やら恰もわたしの内側へとそのまま吸い込まれるかのような印象がありました。でも一息付いた後、やがて手足が動き始め、机の上に与えられた箱のなかの玩具やら粘土などを一つ一つ眺めて、結構自由にそして満足げに遊び始めます。そうであっても、今尚も、自分とは距離のある、もう一人の誰かとしてわたし(Miss Yamagami)に接触を求めようとする気配は殆ど見られません。このことは、トミーが母親との間で甚だしい長すぎる共生状態にあったことを示唆しているかのように思われました。セッションとセッションの間わたしは彼にとって不在であるわけですが、そうした不在のMiss Yamagamiを通して、彼は自分がわたしとは離れているという事実(separateness)に気づき、徐々にはっきりと強烈に‘誰とも違う、己自身’を意識始めたということはあるかと思われまます。このことは、彼の小児的万能感的空想、つまり全面的に完璧な良い母親との未分化な一体感に決着を付けざるを得ないわけで、その取り組みは彼にとってはかなり苦痛であり、大いに葛藤を強いられたわけでありまます。

治療のプロセスに従い、そのようにして彼は極めて傷つきやすい段階を通過しなくてはなりません。全世界が(或る意味で、それは母親ということになります)が)邪悪なものに豹変するとか、すべてがグジグジャに崩壊するなり、木っ端微塵になるなり、もしくは衰弱をきわめ、ついにはあっけなく消失してしまうといったことです(例えばお城、火山、海洋にある岩礁とか)。これらは事実、すべて彼自身のからだの感覚そして‘フィーリング feelings’の投影なわけです。そこには、‘内側の母親’に向けての彼の無力感、失望、貪欲さ、燃え滾る憤怒、そして肛門期的爆発的攻撃といったことが表れております。そしてこうしたことがいっそう明らかになるにつれ、今や彼の意識にもそれが認められるようになったといえましよう。殊にこの夏季休暇のあとのセッションにおいて、転移状況にかんがみ、それらについて詳細に吟味検討が加えられたわけですが、その直後彼がセッションから遁走を企てたということがありまして、この間の事情をよく説明しているかと思われまます。すなわち彼は、わたしは大丈夫でまだまだ彼と一緒にセッションを続けられるということ、言い換えれば、わたしに彼が手酷い損傷を負わせたわけでもなく、その結果わたしが彼に対してひどく心証を害しているといったわけでも決してないということ、そんなふうは大

丈夫なんだと慰められる必要があったわけなのです。

毎回のセッションでわたしと一緒にいることをとおして、徐々に彼は罪悪感および迫害といったことから自由になってまいりました。やがて彼の心のなかにわたしが「スペース」をもつことが許されるようになっていったのです。それは言うなれば、「コンテナcontainer」ということになります。それらは「象徴」のかたちを取り、彼の空想において船、家、もしくはプレーグラウンドといったかたちで登場いたします。しかしながら尚も、彼の心のなかではわたしが大丈夫無傷のままにいられるかどうかということは常に疑問視されており、それは休暇でセッションのないときなど際立ってその不安が嵩じます。彼は、コンテナとしてのわたしの内側(inside)にどんなものがコンティン(包容)されているかといった考えを推し進めてまいります。このことをきっかけに極度の嫉妬心、憤り、敵愾心などが惹き起こされ、そして彼はわたしとその‘家族’(と彼が想像したもの)に向けて激しい攻撃を加えるのであります。たとえば、ミニカーを使って衝突事故をしばしば演出した際などがそうでした。それはまた彼の空想、家(もしくは銀行)が悪漢たちに侵入され、その内側に貯えられたすべてのものが奪われるといったこととか、「道具置き場」の屋根に穴が開いていて、それで雨漏れのせいで中に置かれてあった道具類がすべて錆び付いてしまったといったことにも表れております。

こうした攻撃が起きるごとに、その結果として彼の‘内側’には損傷を負う母親が抱えられることとなります。それで彼は再び良き母親を建て直さんとして「償いの仕事(reparation work)」に猛烈に精を出します。そうした理由で、彼は母親に良き父親なるもの(a good daddy figure)を備えんと致します。例えば、大工、技術屋(車の修理屋)、庭師といったふうに…。しかしながら、そのことは父親が自分よりも優位なる立場にいることを認めざるを得ないことになるわけで、それを認めるのは彼にとってどうしても耐え難いわけです。それでその父親にとって代わろうとするあまり、父親の持てるすべて、知性、精神力、技術、そして知識などを奪わんと躍起になります。それはまるで「着せ替え人形 dressing up」とも言えるほどに、次から次へと彼はその空想においてさまざまに父親の‘借り着’を試みます。船乗り、庭師、店主、炭鉱夫(図例; 1977/01/07)といった具合に…。そうしたことがはなはだしくなるに連れて、彼は父親の報復を恐れるようになってまいりました。その怒れる、敵対的で嫉妬深い、尊大な父親に対しての恐怖心に取り憑かれるとき、それとの対決から身を回避せんとするために、彼は敢えて退行を試みます。いかにも人畜無害なふうを装い、そして成長して大きな男の子 a big boy になることをまったくのところ断念してしまうかのようなことになるわけです。



トミーは、まだまだ治療を続ける必要がありますでしょう。たぶん自己維持力が高められてゆくためにも。そしてそれが成功するかどうかの決定要因として、彼が引き続き定期的にセッションに出席することが望まれると考えております。

Chizuko Yamagami

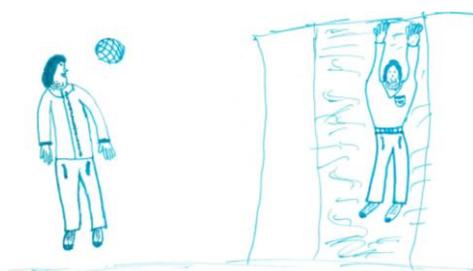
■資料その2:トミーについての総括レポート (日付:1979年9月30日)

トミーの治療は1976年6月30日に開始し、3年3ヶ月を経て1979年9月24日に終結いたしました。週一回のセッションです。それは彼にとって、「思考するスペース」を心の内に育ててゆくプロセスでありました。それは実に遅々たる歩みであったわけです。おっかなびっくり、よろよろとぐらつきながらも経験していったこととなります。その「思考するスペース」とは、対象および出来事の記憶を、時間を経たあとでも抱えることができ、そしていろいろ思いめぐらす(想像することができるといった)心的スペースなわけです。そこに於いて、「今・ここ」といった時空を遥かに超越し、物事そして対象を整理し、かつ構成してゆくことができるわけであります。トミーについて特徴的なことは、その自己の内側と外界に境界線 boundary を設定することの難しさであります。そして彼は往々にして内なる感覚に圧倒されがちで、しばしば外界で生じるところの現実的な事象にそれらを投影するあまり、見当識が危うくなるようであります。例えば彼が恐怖として訴えることですが、インクが皮膚に触れたりすれば、そこから体内に毒が回るのではないとか、矢が偶然にも屋根に飛んできて、そこに刺さっていたりすれば、彼が学校に行っている間に、母親が買い物に出掛ける際それが落ちてきて彼女を突き刺すのではないかといったことです。彼の心の内では、いろんな出来事(もしくは対象)の関連付け・繋がりという意味合いにおいて、ひどく混迷をきたすことがしばしばあるようです。その結果として、或る2つの出来事(もしくは対象)が関連づけられ繋がりを得るとするのは絶えず彼に危険視されることとなります。そこに破壊的な何か、それも邪悪な何かといったことが想定されるわけです。この理由から、殊に両親間の性交、そして母親の内側の赤ちゃんなどといった考えは、彼にしてみれば「タブー(禁忌)」なのです。トミーがわれわれのところに初めて連れてこられた当初、彼は自分一人では眠れないと訴え、両親の寝床に潜り込むものだから、両親は幾晩も全然二人だけのプライバシーを持たずにいたということが事実報告されております。

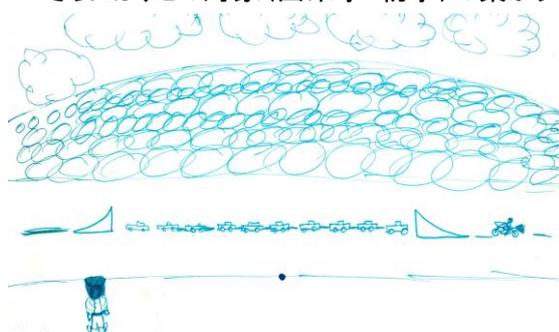
わたしのもとに通い始めた時彼の年齢は11歳6ヶ月でありましたが、父親はわたしに、トミーはまるで絵に描いたような、おとなしい‘子羊’みたいなのだと、その印象を語っております。そして今や彼は15歳近くになろうとしているわけです。身体面において彼は近頃ここ半年の間に目立って随分と成長しましたし、その外見はいかにも思春期の青年になっております。かなり長い間わたしは、トミーは果たして大きくなりたいと思っているのかしらと随分懐疑的でした。前思春期の段階で、彼はまったくのところに荒れ狂うところの「生(もしくは性)衝動」に圧倒されていたように見受けられます。それでどう対処したらいいものか途方に暮れており、それらが外へ向けて暴れないように唯一考えられることとしてはそれに完全に‘拘束衣’を覆い被せてしまうことのようなのでした。でも、そのように抑制を自らに強いることもいよいよ限界だったようです。犬やら見知らぬ年寄りを理由もなく怖がるやら、就寝時には家中の扉が閉まっているかの確認をしないと落ち着かなかつたり、果ては自分の頭に変な声が聞えるようになっておりました。

セッションの沈黙のなかで彼と向き合っておりますと、まるでトミーではなく‘壁’にでも向かっているような、というよりむしろその壁を突き抜けた向こう側の‘虚無’つまり‘何もない nothingness’を見ているような気分になったものです。一見して彼に気持ちを通じさせることは難しいように思われました。恰も彼は不能 impotence(もしくは不感症 frigidity)にでも陥っているといったふうなものでした。それは言うなれば、転移上彼は母親との接触を願望するといったことを意識することを自らに禁じていたということでありましょう(近親相姦なわけです!)、そしてそれは父親との競争心にしても同じです。それがあまりにも恐ろしい暴力に発展することを恐れるわけです。(実際のところ、父親はがっちりした恰幅のいい体格ですし、トミーのような華奢な‘子羊’がどうしたって勝てっこない相手なのですから。。)

それぞれ毎回のセッションで、彼は3枚から4枚の画用紙を使いました。何かしら描くには描くにしろ、それについてコメントしたり、連想を語るといったことは滅多にありません。でもそれらの絵の資料には、両親間の‘繋がり’そのものに、なにがなんでも邪魔立てする、横槍を入れるといった彼の万能感的空想が歴然としてうかがわれております。例えばホンダのバイクがガレージの外に放置されている(1978/07/31)やら、ゴールキーパーがボールをゴール直前に阻止することに成功する(図例; 1978/07/17)やら、ボートが港に錨で繋がれ停泊しているだけとか(1978/11/27)、ロケットが発射寸前であるが、それは額縁のなかの絵でしかない(1979/01/22)とか、トレーナーが荷物を輸送用船舶に積もうとしているが、その機械を操作できる作業員が誰もいないといったこと(1979/07/02)です。



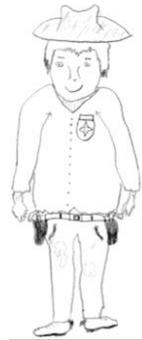
さらには、この対象(出来事・物事)の繋がり(link)を結び付けるといったことの困難は、彼がセッションと次のセッションに繋がってゆくといった、つまりその連続性を信じるこそして期待するといったことをイメージすることがひどく難しいということにも反映されております。一つのセッションから次のセッションのギャップを越えることは危ない‘綱渡り’であり、彼にとっては死をも意味するような危険な賭けなものでした。「Evil Kani evl」がずらっと列をなして



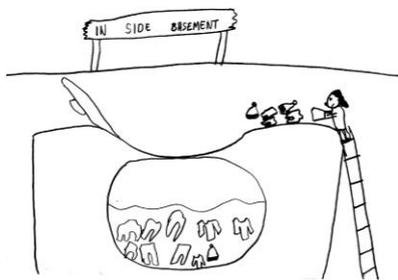
並ぶ車を端から端へとジャンプするにも似て。。(図例: 1978/07/24)。そして徐々に試行錯誤を経て、まあ何とかなるさ。。と自信を得てゆくのであります。それは、彼の描く絵にも例証されているかと思われま。例えば、気球に二人の乗客が乗り込んでおり、イギリス海峡をそれで越えるといった気球の旅がそうです(図例; 1979/01/08)。一人の兵士が飛行機から飛び降りるところで、彼はパラシュートの訓練中である(1979/01/08)とか、発射されたスペースシャトルが再び地球に不時着するといった絵(1979/05/02)にも。。



かつて母親を巡っての「小児的な専有欲」が懲罰的な父親からの脅かしにあうといったことが徐々に緩和されてまいりました。それはおそらく、寛容的な(母親オツパイ&父親ペニスの)「結合両親像 combined parental figure」がトミーの大きくなろうとする意欲そして楽観的な無邪気さを受容しながら、彼を育てているように思われました。外界へ向けて大いに躍進する彼がうかがわれます(図例;保安官 1979/01/29)。



これらの彼なりの考えを廻らせることと並行して、やがて「母親の‘内なるスペース’」というものについて何やら考えがまとまっていったようであり、著しい進展がみられました。例えば、それは5階建ての大きな建物の絵であります。そこには10家族ほどの住まいがありまして、駐車場も完備され



ており、その地下には巨大な洗濯場まであります。そこは10家族の洗濯物をすべてまかなえるほどの広さなのです。それに10人の洗濯担当の女性たち laundry-ladies までいるのですから…。全然大丈夫というわけです(図例;1979/03/26)。これは、母親の‘安寧 well-being’についての現実的な‘思いやり concerns’が彼のなかで募ってきたことを示唆します。それはすなわち、彼女が彼に対処するだけの十分な能力があ

るといこと、耐えられないとか不安でたまらないといったことは辛うじて避けられるといった、彼女のレジリエンス resilience に幾らか彼が信頼を寄せることができるようになってきたともいえます。これこそが「良き結合両親像」の一つの決定要因であります。

彼はわたしとの別れ、つまりセッションが終了するという心準備をしていたことは随分とはっきりしております。彼にとっては大きな課題でありましたでしょう。それで彼はわたしに自分の将来について語りました(1979/06/04)。カーペンター(大工さん)になろうといった願望です。研修コースを済ませ、その後の何年かの見習の実地訓練を得て、それから資格を得るのにカレッジに入学するといったことでした。彼は極めて現実的に将来のプランを考えているようでした。そんなふうには彼自ら決断したということとはとても重要なことなのです。少し前ですと、彼は父やら兄と同じく、技術職に進もうとしていたのです。しかし今では自分自身をより見極めることができ、大工という職業が自分には適していると判断できたわけです。それが彼に希望の持てる未来を与えるように思われたのです。それは、学校の木工の授業でその教科担任の先生と話をしたことから、そのような考えが頭を擡げたようです。ここで彼は今や自分の脚で立つ(自立)といったことをしっかりと考え始めたといえます。

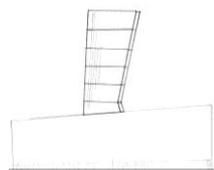


セッションの終了前の3ヶ月間というものは、彼の図画は概して抽象的なものでありました。彼はそれについてはただ「パターン」だとか「シェーブ shape」だとか言うばかりでした。それは近づくセッションの終わりについて彼の内なる‘動揺’で密かにてんやわんやしていることとどうにか耐えているといった彼らしいありようかと思われたのです。かつてしばしばそうであった

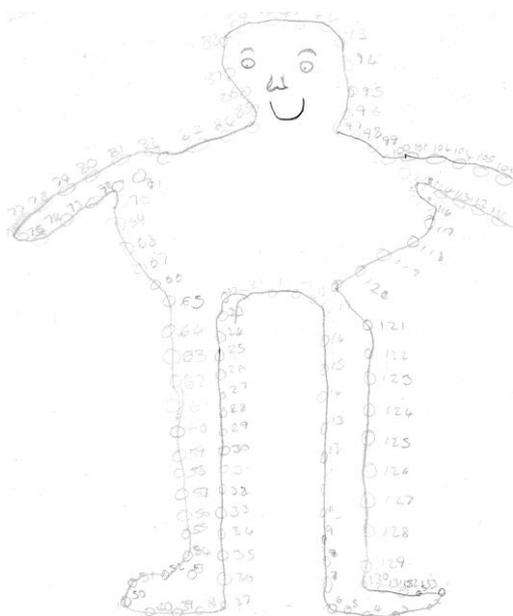
ように、いわば仮面の下に身を潜めて(図例;ピエロ 1979/04/30)…。そうしながらも、彼はどうか安定を保っているふうでした。そうであっても侮蔑的(mockery)な絵を描くこともありました。例えば、「Miss Piggy」です(図例; 1979/09/03)。それは転移上のわたし(すなわち母親オッパイ)への当てこすりともいえましょう。そこには、密かに彼の嫉妬心やら敵愾心が噴出していたかのようです。すなわち、トミーを‘乳離れ’させた後に、わたしが次に生まれてくる‘赤ちゃん’たち(わたしの次の‘分析患者’ということでもありますが)の世話にてんてこ舞いしてるのをちょっぴりシニカルに揶揄していたかのようでもあります。



そしてその続きとして、彼の描いた「ペンキ塗りのブラシ」の絵(図例; 1979/09/10)にわたしは興味を覚えました。それについて彼が語ったことというのは、<玄関の扉の古いペンキが剥げ落ちたから、それで新しく塗り替えるの…>ということでした。そして新しい子どもを迎えて、転移上わたしなのですが、部屋(=母親オッパイ)をうんと綺麗にしなくてはといったことなのでしょうか。そんな



認識すらもうかがわれます。そこにはまさに「修復する父親ペニス reparative penis」というものが髭髯といたします。それこそが母親の内側に起こる荒廃・損傷・疲弊から母親を回復させんためには絶対必要な父親的機能といえましょう。それを彼が撮り入れたことは幾らか確かなのでしょう。そんなふうに、彼のなかでは「どうか己れの為すべき仕事は為し終えた」といった安堵感に落ち着いたかのようでした。この「修復する父親ペニス」こそが、もう一つの「良い結合両親像」の決定要因といえましょう。



さて、彼の最終セッションにおいて、彼は一枚の絵を描きました(図例; 1979/09/24)。それは「丸印が列なって一つになる dots linked all in one」と彼は語ります。やがて幾つもの丸印がそれらを繋げる線となって、徐々に或る人物の輪郭を成してゆきます。彼は、それを「男の人 man」と言いました。彼はその男の人の顔に<ハッピーな笑顔>を付け足しました。それから一つずつそれら丸印にナンバーが付けられていったわけですが、なんと133までありました。それはわたしの許に通ってきた彼のセッションの回数にほぼ匹敵しておりました(!)。その意味するところは、彼が一人のひと person になるために援助してもらったこと。ここでのMiss Yamagamiとのセッションを通して彼は一人の

個性ある自分というものに出会えたということを語っていたと思われます。わたしはそれを、彼なりの流儀でわたしに「有難う！」を言ってくれたものと嬉しく思ったのです。勿論課題は残ります。彼に輪郭が出来た。少しは目鼻立ちが見えてきた。残りは‘中身’だということです。それを示唆して、彼が将来どんなひと(man)になってゆくのか、その経験をとおして‘内なるスペース’がどんどん充たされてゆくことを

期待したいわね、と最後わたしは彼に伝えたのであります。

最後の親面談において母親はわたしに、<ようやくあの子は、自分というものがわきまえられてきたようですわ(He's got a mind of his own now)>と、その感慨を語っておいででした。この母親の直観は凄いです！実にそのとおりなのでしょう。これから彼がどのような‘内的スペース’を開拓し、どんな成果を成し遂げてゆくのか、将来がとても期待されます。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

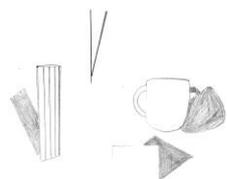
■後記

トミーの両親は、見識もあり、誇り高い‘ワーキングクラス’であります。彼らは、その帰属するコミュニティにおいてわが子が親たちの伝統を引き継ぎ仲間たちに有能であると認知されることを願う。階級社会であるイギリスにおいて、アッパークラスは勿論、ミドルクラスもそうでしょうが、ワーキングクラスにしてもそれは同じなのです。わが子弟がそれぞれ属する社会において‘有効活用’されること、それが親の願いであり、親の誇りはすべてそこに収斂されてゆきます。だとしたら、このトミーは何とまあ頭痛の種類でしょう。<おとなしくて、まるで‘子羊’のような・・>と、父親がわたしにその戸惑いを表現したように、どんなに可愛いとしても<これでは困る・・>というのが親たちの率直な気持ちでしたでしょう。上の兄と見比べてあまりにも違う。これから先、これじゃモノにならないということは家族にとって不名誉といわないまでも大きな戸惑いのはずでした。しかも来所時の一年前頃から、彼はおとなしい‘ひつつき虫’だけではなく、なにやら妙なことを口走るようになり、頭が変になったんじゃないかと本人も訴える。途方に暮れた親がまず家庭医に相談した。そしてそこからわが児童精神外来のDr. Cameronに連絡が入り、そこからSenior PsychotherapistのMr. John Bremnerへと繋がり、その指導下にあったChild Psychotherapist Traineeのわたしの手にこの子どもは託された。わたしの出番となったわけだが、でもあまりにも手応えが乏しく、当初わたしの気持ちが奮い立ったはずもない。おっかなびつくりの様子眺めに時を費やし、やがてミニカーで衝突を繰り返すといったふうに彼の破壊衝動が起動するようになって、どうにかトミーは息を吹き返したかのようだった。両親は治療を支持してくれた。PSWのヘレンが親たちを折々に援助した。この子羊を囲い込む柵(セーフガード)の守りは堅かった。実に幸運だったと思う。

この治療の終結はわたしの帰国に合わせたものであって、わたしのなかにも幾分か充分ではないのではないかという懸念はあった。だがタイミングとしてはどうやら無理はなかったようだ。彼は自分の将来を語っていた。カーペンター(大工さん)になろうとしていた。両親の望むところの将来の方向づけに合致するものでもあったろう。それを彼が自らの意志で決められたのだから、大いに誇りにしてい。後は両親に任せられると思った。最後に彼らとの面談もした。心残りはない。

しかしながら今回記録を読み返しなが、一つ新たに気づいたことがある。そこに「出産外傷 birth trauma」とのメモ書きがあった。何だろ？それに「赤ちゃんのからだグジャと押し潰されている baby squashed body」という記載もあった！おそらく母親がそうわたしに語ったのではないと思われるが、わたしに記憶がない。つまり出産がかなりの難産であったことが想定される。仮死状態で生まれたのだろうか？保育器に入れられたとは聞いていないが…。いずれにしても何やら不穏なものがうかがわれる。彼が生きるうえでどれほど母親に‘付着的’であったか、来所時での恐怖症など彼の深刻な憂慮すべき事態、そしてそのただならぬ緊張感やら怯えはどうか出産時の外傷的な「感情の記憶 memories of feelings」を引き摺っていたとも思われる。彼のパーソナリティー、その心的ありようを出産時の状況との関連性で問うことをしていなかった自分に気づかされた。これは盲点であったろう。

因みに、彼の繰り返し執拗に描いた「お家の絵」はいかにも‘二次元的’であり、彼のお家はフェイク（まがいもの・見せ掛けのもの）でしかなかった。そこには真の意味でのいちも人の暮らしも見当たらない。



まずはそこに抱えてくれる誰かの腕・手がないことが問題だ。確かに彼がわたしを見る虚ろな瞳にわたしがもう一人の存在として映っているようには感じられなかった。自分を維持するとは、その都度対象となる誰かの内に潜伏し、丸ごとすっぽり包まれることであったのではなからうか。彼の隠れ家としての誰か…。それも秘密裏に…。もしかしたら、彼の絵が示すように、彼

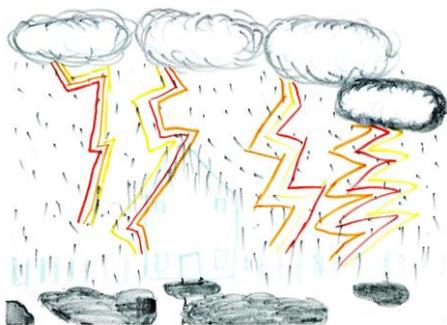
は誰かの影 (shadow) としか自分を捉えられないということだったのか (図例; 1979/09/10)。それが彼の「悲観」の根っこにあった！

振り返って思うに、彼は一貫してセッションのなかで、わたしとの関係において「Come&Go」をワークスルー (work-through) していた。<いたー！いなくなった！あつまたいたー！あれっ、またいなくなった…！でもまた戻ってくる！…>の繰り返し。もしも「Come&Go」という動きが静止したままならば、そこには何も起こらない、何も動かない。すなわち時間も空間もなく、だからのちもないということになろう。そこからわたしが‘動くもの’として心的に把握されてきたということがあろう。それが映しこまれて、己自身もまたそのように‘動くもの’として受容され始めた。彼にとつては自分という実態 (リアリティ) を知ること、その輪郭を維持するといったことが大きな課題であった。思春期を迎え、性的衝動が危ぶまれていたのは確かで、それは内に抱えられず、外に漏れてしまう。そこであちこちに抱えられない己れの破壊的衝動が投影されて、足元の掬われるような恐怖を彼は感じていた。自分を危険視する彼がいた。どこへ逃げ込めばいいものやら…。

彼の瞳は、わたしを吸い込むようにわたしに癒着し、そしてまた彼自身もわたしに吸い込まれるように一体化していた。恰も何も起こらない、何も起きてはならない (Nothing should happen!) という呪文を唱えてるふうで…。そうした自己催眠下に彼はあった。いのちは凍結したまま。だが彼の内側からの促しはそれを裏切っていた。いのちの目覚め、からだの目覚めである。「何も起こらない」から「何かが起こる」ことへ向けて、耐性が出来始めた。大丈夫ということ。「Come & Go (いたー！いなくなっ

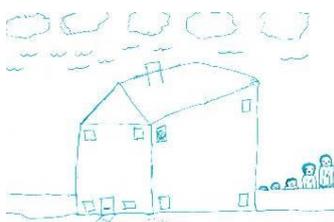
た！)、それらのギャップに‘橋を架ける’ものを彼は見つけ始めた。彼の描く「お家の絵」がそう。それの変遷をとおして、つまりはいのちの無いそれがいのちを宿して行くさまがうかがわれましよう。時間が充たされる。空間が充たされる。「いないいないばあー」である！

トミーは、1976年の末頃から「お家の絵」を頻りに描くようになります。それは、彼にとって「母親オッパイ」がどのように見られていたかを知る手掛かりになりました。実に、最初それは空き家でした。新しくひとが引っ越してくるんだ、と彼は言いはしましたけれども(1976/12/13)。その後も何ら目立った進展は見られず、依然としてお家は二次元的で平坦な、いわば「絵に描いた餅」そのままに‘ニセモノ・まがいもの’のお家なものでした。それだって、彼がセッションをキャンセルした後とか、或いはセッションのお休みの期間の前後に描く「お家の絵」は、しばしば荒れ狂う



豪雨とか落雷の閃光で真っ黒に塗りつぶされ、煙突が燃えるやら、散々な目に遭うことになります(図例;1977/12/14)。すなわち「母親オッパイ」は、彼の欲求不満の耐性の無さからくる侵入的な攻撃に晒されることになり、脱価値化、損傷、破壊といったことが惹き起こされるわけです。そしてそれはまた、映し鏡のように彼自身の内的真実をも映しておりました。すなわち言うなれば彼は内側に何も良いものなど残らない、虚ろで空っぽな状態にあったのです。さらには空想上において、彼自らの口唇愛的かつ肛門期的な破壊衝動を投影した対象によって迫害されるといった結末を惹き起こすようであり、「去勢不安」はおそらく苛烈でもありましたでしょう。

思春期を迎え、彼の身体がそれまでとは幾分違ったものになろうとしていることが意識され始めました。それがトミーにとって大きな不安の引き金となりました。男性としての有能性 *potency* が問題でした。そして彼の夢やら自由にあれこれ語ったところから推量しますに、彼のこころのなかではどうやら父親との熾烈なエディプスの葛藤に突入したもようが見てとれます。でもどんなにどう抗おうと、彼の敗北は避けられないのです。それで、ついには奴隷の身に貶められるとか八つ裂きの刑とか致命傷を負うといったことになりかねません。その「父親」とは冷血漢であり、圧政的で、情け容赦ない主人(マスター)であり、途方もないパワーが備わっているからです。こうしたことを通して彼は、その「内なる両親カップル」を巡って、彼自らの侵入的かつ羨望に満ちた肛門期的攻撃欲に対処せんと悪戦苦闘をしていたともいえます。それで、どちらかという成長したいという願望から怯えと緊張で尻込みしてしまい、生きる意欲をも麻痺させてしまっているように見受けられました。つまりは、「自己去勢」であります。



1977年の復活祭の頃から、トミーはわたしとのセッションにおいて毎回ますます強迫的に「お家の絵」を描くことに熱中しております。少しずつそれは三次元的になり、四次元的にもなり、お家の中には窓越しに誰か暮らしている人の気配がうかがわれます(図例;1978/03/13)。

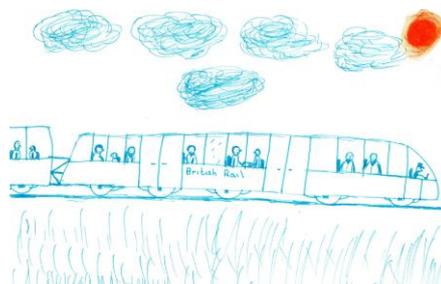
またお家の外の景色もどんどん広がって展開されてゆきました。ショッピング街やら公園そしてスイミングプールなど…。そこにはもはや疎外感はありません。自分の居場所があるといった安心がうかがわれます(図例;1978/09/04)。



ここで取り分けて興味深いのは、雨降りの日、母親とおぼしき人が傘をさしており、そこからかなり離れた位置に彼とおぼしき男の子が立っている絵です(図例;1978/07/02)。これは、どうやら彼のなかで母親との現実的な‘距離 distance’が取れるようになったことを意味しており、この傘は「修復する父親ペニス」のシンボルであるのは間違いないでしょう。彼の小児的な攻撃欲(尿道愛的な)から母親がしっかりとガードされているといったわけです。ここによくやく何やら「楽観」が彼のなかに兆し始めたようにうかがわれます。

実は、彼は「お家の絵」と並行して、それに負けないほどたくさんの量の「乗り物」の絵を描いております。

モーターバイク、スポーツカー、自家用車、二階建てバス、ヘリコプターなど。それらはすべて「Come&Go」のギャップつまり距離(distance)を越える手段であります。積極的にこうして「内なる母親オッパイ」との‘距離’を克服せんとして挑戦が試みられていたといえましょう。その試みはもはや受動的ではなく、もっと能動的で果敢でありました。(例;



乗馬 1978/04/17、鉄道列車の運転手さん 1978/05/08、乗用車の運転 1978/07/10、スキー



1978/07/17、サーフィンで波乗り 1979/02/03、ボートの船長さん 1979/02/12、ヘリコプターの操縦 1979/02/19 など…) ‘距離’に対して無力感で圧倒され、「為すすべなし」といったことではもはや

なさそうです。破壊衝動への耐性が強化されるにつれ、自分を危険視することもそれだけ緩和されてまいりました。かくして彼の内的対象の‘安寧’は守られてゆくようでありました。同時に彼のなかで克己心やら生きる意欲も出てまいりました。



やがて彼の描く「お家」は、いのち溢れる、意味ある「内側 inside」を持ち始めてゆきました。大きな5階建てのビルの地下には駐車場があり、また洗濯コーナーもあり、人々の暮らしが守られております。ひとびとの活き活きとした暮らしが描かれてゆきます。そこには何やらのびやかな印象が深まってゆくよう

でした。どうやら彼のなかに摂り込まれた「修復的な父親ペニス」がしっかり機能しているさまがうかがえます。大いに期待できそうではありませんか。

彼が大工仕事を一生の仕事として選択したことには意味がありましょう。人々の暮らしを支援するために、行き届いた‘思いやり’の手が求められている。断じて「お家」はニセモノ・まがいものであってはならないのだから…。ぬくもりと慈愛をもたらす創造的な「母親オツパイ」が彼の希求するもの、それを擁護せんとする「修復する父親ペニス」との同一化が彼を底支えしている！それが彼の仕事にもなった！これは彼の本質性に根ざすもの。その意味で間違いなく彼の天職となりましょう。

トミーの治療終了にあたって、最後に両親と面談した際、彼にガールフレンドができたという話を初めて



て聞いたわけです。確かに彼の靴のサイズは大きいものになり、腕時計だってちゃんと身につけるようになっていた。いかにも青年といった外見である。ふとわたしは、彼女とのファーストキスはしたかしらと思った。勿論そうでしょう。それはかつて彼が密かに夢見たものなのですから（図例；蝶々1976/07/28）！そして父親と釣りに一緒に出掛けたり、ガールフレンドから電話があったときなど、母親にその語らいの内容を気軽にしゃべりするんだそうな…。彼らがそうしたトミーとの打解けた家族関係を楽しんでいるようすをわたしは嬉しくうかがった。

帰国後数年経て、かつて受付の秘書をしていたジーンからたよりが届いた。トミーの母親に偶然路上でばったり会ったんだとか。それでトミーの近況を聞くことができたとか。彼は順調にカーペンターとして見習いの実地訓練へと進んだとのことだった。母親はわたしに感謝している、よろしく伝えてくれとジーンに頼んだらしい。わたしは異国の地で決して無為ではなかったのだと感ぜられた。多くのチャンスに恵まれ、彼らの仲間の一人としてわたしは児童臨床に携わっていたのだ。そして、彼らとともに結束して‘一人の迷える子羊’を救出した！ そう思えば、誇らしい。（2018/01/14 記）